

古田史学の会・東海

東海 の 古 代

第155号 平成25(2013)年7月

会 長：竹内 強

編集発行：事務局 〒489-0983 瀬戸市苗場町137-10

林 伸禧 〈Tel&Fax：0561-82-2140、メールアドレス：furuta_tokai@yahoo.co.jp〉

ホームページ：http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

「第25回 愛知サマーセミナー2013」で講座を開催します

第25回愛知サマーセミナー・2013を7月13日(土)～15日(月・祝)に南山大学・南山高等学校(男子部・女子部)で開催されます。本会は、「古田史学」の普及・広報のため高校生・一般の人達を対象として講座を開催します。

日時等は、次のとおりです。

日 時：平成25年7月14日(日)、

13時10分～16時10分(第3・4限)

会 場：南山大学(R棟、3階・R32教室

(R棟の入口は2階にあたります。、詳細は別紙「南山大学アクセス地図」を参照してください)

・名古屋市昭和区山里町18番地

・地下鉄名城線(環状線)「日赤八事」駅下車、徒歩12分

演 題：縄文から律令時代までの日本の古代史

—縄文時代から弥生、律令時代へと続く日本の古代史、西暦700年までの歩みを教科書とは違う視点から考えてみたい。『日本書紀』・『古事記』の世界は真実の歴史なのか？

卑彌呼、聖徳太子、大化改新の実像を問い直す。—

参加費：無料

その他：・駐車場はありません。

・愛知サマーセミナー実行委員会

TEL：052-881-4357

ホームページ：http://www.samasemi.net/2013/

愛知サマーセミナーとは、愛知県内の私学高校の生徒・先生及び保護者(一般人)が中心となり**誰でも先生、誰でも生徒。**

をテーマに、1989(平成1)年に開催されました。初年度の講座数は72でしたが、年々その数は増え、昨年は1400の講座が開催されました。

昨年は、古田武彦先生を迎えて「古田武彦講演会」を開催しましたが、今年には本会会員による講座開設です。

「遣隋使」と『隋書』倭国伝

瀬戸市 林 伸禧

1 はじめに

通説では、聖徳太子が小野妹子を遣隋使として派遣したとされている。それを受けて、中学校の歴史教科書は、別表A“中学校の「歴史教科書」における「遣隋使」記述状況”に整理したとおり、通説に沿って記述している。

これに対して、古田武彦氏は、推古天皇が遣使を派遣した国は唐であると述べている。

そこで、改めて『日本書紀』推古紀及び『隋書』での「遣隋使」に関する記述について検証した。

2 検証結果

『日本書紀』・『隋書』等の史料を基に、その記述内容を検証*1したところ、次のとおりその結果を整理できた。

- ① 聖徳太子・推古天皇は、隋に使者を派遣していない。
- ② 聖徳太子・推古天皇は、小野妹子を「遣唐使」として派遣した。
- ③ 隋に使者を送ったのは倭国(倭)である。
- ④ 第1回の遣隋使の派遣は、開皇20年(600年、推古8年)である。

3 『日本書紀』・『隋書』の記述内容

(1) 『日本書紀』推古紀及び『隋書』における両国の遣使について、年表形式に整理すると、別表B“『日本書紀』推古紀及び『隋書』の遣使に関する年表”のとおりである。

この表から、推古紀に記述されている内容を

かいつまんで列記すると、次のとおりである。

- ① 推古15年(607年、大業3年)7月、小野妹子を大唐に派遣した。
- ② 推古16年(608年、大業4年)4月、大唐から派遣された鴻臚寺掌客の裴世清(国書持参)は、小野妹子に従って筑紫についた。
- ③ 同年9月、裴世清(推古天皇の返書持参)が帰国した。その時、小野妹子を随行させて大唐に派遣した。
- ④ 推古17年9月、小野妹子等が大唐から帰国した。
- ⑤ 推古22年(614年、大業10年)6月、犬上君御田歙等を大唐に派遣した。

つまり、遣使は、「隋」ではなく「唐」に派遣されたと記述されている。

次に、『隋書』で推古15年(大業3年)以降の日本から唐への派遣についての記述を列記すると、次のとおりである。

- ① 大業3年(推古15年、607年)、倭王多利思北孤は隋に使者(国書持参)を派遣した。
- ② 大業4年(推古16年、608年)、隋の煬帝は文林郎裴清を倭国に派遣した。そして裴清は倭王と接見した。
その後、倭王は送使をつけて送った。
- ③ 大業6年(推古18年、610年)、倭王は使者を派遣した。

(2) 前項(1)から、分かることは、

- ① 『日本書紀』推古紀と『隋書』についてその年代は、おおむね一致する。
- ② 中国が派遣した使者に対する日本側の対応を対比させると全く異なる。表1“『日本書紀』・『隋書』における中国使者比較表”のとおりである。
- ③ 記事の内容から、推古紀は、唐との折衝を記述しており、『隋書』では、倭国との折衝を記述していることが明確である。

(3) 傍証として、推古紀で裴世清が持参した国

*1 古田武彦氏の次の著書を参考とした。

・『失われた九州王朝』：「初版」1973(昭和48)年8月、朝日新聞社。
「復刻版」2010(平成22)年2月、ミネルヴァ書房。
・『古代は輝いていた』Ⅲ：1985年(昭和60年)4月、朝日新聞社

表 1

『日本書紀』推古紀・『隋書』における中国使者比較表

項 目	日本書紀(推古紀)	隋 書
派遣時期	推古十六年(六〇八年)	大業四年(六〇八年)
裴世清の官職	鴻臚寺典客署の掌客(正九品)	秘書省の文林郎(從八位)
歓迎状況	<p>為唐客 更造新館於難波高麗館之上 六月壬寅朔 丙辰 客等泊于難波津 是日 以飾船卅艘 迎客等于江口 安置新館 於是 以中臣宮地連烏摩呂・大河内直 糠手・船史王平為掌客 秋八月辛丑朔 癸卯 唐客入京 是日 遣飾騎七十五匹 而迎唐客於海石榴市 術 額田部連比羅夫 以告礼辞焉</p>	<p>倭王遣 小徳阿輩臺從數百人設儀 仗鳴鼓角來迎 後十日 又遣 大禮哥多毗從二百 餘騎郊勞</p>
中国使者との接見状況	<p>【国書】 其書曰(※皇帝→推古天皇) 「<u>皇帝</u>問倭皇 使人長吏大礼蘇因高等 至具懷 <u>朕欽承宝命 臨仰区宇</u> 思弘德化 覃被含靈 愛育之情 無隔遐邇 知皇介居海表 撫寧民庶 境内安樂 風俗融和 深氣至誠 遠脩朝貢 丹款之美 朕有嘉焉 稍暄 比如常也 故遣鴻 臚寺掌客裴世清等 稍宣往意 并送物如別」 其辞曰(※推古天皇→皇帝) 「東天皇敬白西皇帝 使人鴻臚寺掌客裴世清等至 久憶方解 季秋薄冷 尊何如 想清愈 此即 如常 今遣大礼蘇因高・大礼乎那利等往 謹白 不具」</p>	<p>【口頭】 大悦曰(※倭王) 「我聞海西有大隋 禮義之國 故 遣朝貢 我夷人 僻在海隅 不 聞禮義 是以稽留境内 不即相 見 今故清道飾館 以待大使 冀聞大國惟新之化」 清答曰(※中国使者) 「<u>皇帝</u>徳並二儀 澤流四海 以王 慕化 故遣行人來此宣諭」</p>
皇帝代位	<p>朕朕欽承宝命 臨仰区宇 ※高祖・初代(618～626)</p>	<p>獲奉祖宗欽承景業 ……高祖文帝 天明命*1 ※煬帝・二代(605～616)</p>
歓迎従事者の官位	<p>中臣宮地連 烏摩呂、大河内直 糠手 船史 王平、 額田部連 比羅夫</p>	<p>小徳 阿輩臺 大禮 哥多毗</p>

*1 出典：『隋書』帝紀第三(煬帝上)大業三年條

(中華書局版二十四史『隋書』69頁)

書には、

朕欽承寶命 臨仰區宇*¹

と、建国の初代が述べる文言が記述されており、唐初代の高祖の文言と思われる。これに対して、『隋書』帝紀第三（煬帝）の大業三年條で、煬帝は

朕獲奉祖宗欽承景業……高祖文皇帝受天命と二代目として述べており、代位が異なる。すなわち、推古紀は唐との折衝である。

(4) 以上から、推古紀での遣使派遣は唐である。当然ながら、隋への遣使派遣は、倭王多利思北孤である。

また、『隋書』では、開皇20年（600年）に倭王多利思北孤が使者を派遣してきたと記述しているので、これが第1回の遣隋使である。

4 12年繰り上げ問題

推古17年4月條には、次のとおり

十七年夏四月丁酉朔庚子 筑紫大宰奏上言「百濟僧道欣・惠彌為首 一十人 俗七十五人 泊于肥後国葦北津 是時 遣難波吉士德摩呂・船史龍 以問之曰「何來也」 對曰「百濟王命以遣於吳国 其国有乱不得入 更返於本郷 忽逢暴風 漂蕩海中 然有大幸 而泊于聖帝之辺境 以欽喜」²

（日本古典文学大系『日本書紀』下、193頁）

と記述されているが、推古17年（大業5年）は、隋が中国全土を統治しており、吳国は存在していない。

ただ、『旧唐書』本紀第一（高祖）には、次のとおり唐の建国時期に吳国が存在したとする記事がある。

武徳二年（619年、推古27年）條

九月辛未 賊帥李子通據江都 僭稱天子 國號吳

武徳四年（621年、推古29年）條

（十一月）**庚寅 焚東都紫微宮乾陽殿 會稽賊帥李子通以其地來降**

（以上、中華書局版二十四史『旧唐書』9・12頁）

『旧唐書』のこれらの記事によれば、唐は建国したが未だ全国を統一しておらず、武徳2年（推古27年）～4年（推古29年）まで、吳国が存在したとされる。つまり、621年までは吳国が存在していたということになる。『新唐書』³も同様の記事がある。

ところが、この『旧唐書』の記事に対して、この推古17年は、隋の大業5年であり609年である。621年に対して609年であるから、推古紀の時期に12年のズレが生じていると思われる。当然のことだが、推古紀の609年は、本来621年でなければ時期があわない。

となると、推古17年4月條の記事は、12年後の推古29年でなければならない。つまり、推古紀の記事は、本来の年代である推古29年を12年繰り上げて、推古17年の記事にしたのではないだろうか。

すなわち、推古紀では、唐の建国初期における唐との折衝記事を12年繰り上げ、推古15年～17年條の記事にしたと考えられる。この遣使関係を整理すると、表2“年表—『日本書紀』推古紀（修正）及び隋・唐の遣使関係”となる。

この年表のとおりであれば、年代・記事に何も齟齬を生じない。故に、推古15～17年條の記事は、本来、この表2のとおり推古27～29年條の時期にあった事柄を、12年繰り上げて記述したと考えるものである。

5 『隋書』国伝の疑問点

遣隋使に関連して、『隋書』倭国伝における日

*1 『三国史記』高句麗本紀第八榮留王の5年條

唐高祖 …… 賜王詔書曰「朕恭膺寶命 君臨率土。 ……」

（完訳『三国史記』上、408頁）

と「宝命」を記述している。

また、「宝命」については、古田武彦著『古代は輝いていた』Ⅲの219～226頁参照

*2 『三国史記』百濟本紀第五（武王紀）によれば、百濟が唐に初めて朝貢した時期は、武王22年（621年、武徳4年、推古30年）10月で、利子通（吳国）が降伏する直前である。

*3 中華書局版二十四史『新唐書』913頁参照

表2

年表一 『日本書紀』推古紀(修正)及び隋・唐の遣使関係

西 曆		日 本		中 国			中国記事・推古紀遣使記事	
年	干支	天皇	年	国	皇帝	年号	年	
593	癸丑	推古	元	隋	文帝	開皇	13	【推古即位】
	5		5				5	
598	戊午		6				18	高句麗遠征(第1次)
599	己未		7				19	
600	庚申		8				20	・倭王 姓阿每字多利思北孤號阿鞏雞彌 遣使詣闕。 [東夷・倭国]
601	辛酉		9			仁寿	元	
602	壬戌		10				2	
603	癸亥		11				3	
604	甲子		12				4	煬帝即位
605	乙丑		13	煬帝	大業		元	
606	丙寅		14				2	
607	丁卯		15				3	・其王多利思北孤 遣使朝貢 [東夷・倭国]
608	戊辰		16				4	・3月 百濟・倭・赤土・迦羅舍國 並遣使貢方物。 [帝紀・煬帝] ・(大業3年の明年)上 遣文林郎裴清使於倭國。 [東夷・倭国] ・明年(大業4年) …… 時倭國使來朝 見之曰「此夷邪久國人所用也」 [東夷・琉球国]
609	己巳		17				5	
610	庚午		18				6	・復令使者隨清來貢方物。 [東夷・倭国] ・倭國遣使貢方物。 [帝紀・煬帝]
611	辛未		19				7	
612	壬申		20				8	高句麗遠征(第2次)
613	癸酉		21				9	高句麗遠征(第3次)
614	甲戌		22				10	高句麗遠征(第4次)
615	乙亥		23				11	
616	丙子		25				12	
617	丁丑		25	恭帝	義寧		元	
618	戊寅		26				2	煬帝殺害される。
619	己卯		27	唐	高祖	武德	元	隋恭帝 高祖(李淵)へ禪讓
620	庚辰		28				2	【推古15年丁卯】7月 大礼小野臣妹子遣於大唐。
							3	【推古16年戊辰】 4月 大唐使人裴世清等 從妹子臣 至於筑紫。 9月 唐客裴世清罷歸 則復以小野妹子臣為大使 副于唐客而遣之。
621	辛巳		29				3	【推古17年己巳】9月 小野臣妹子等至自大唐。
622	壬午		30				5	
623	癸未		31				6	
624	甲申		32				7	
625	乙未		33				8	
626	丙戌		34	太宗			9	【推古22年甲戌】六月丁卯朔己卯、遣犬上君御田歙・矢田部造 <small>開名</small> 於大唐。
627	丁亥		35			貞觀	元	
628	戊子		36				2	【推古崩】

※吳年号「明政」:『旧唐書』列伝第六(李子通)

子通入據江都 盡虜其衆 因僭即皇帝位 國稱吳 建元爲明政。

(中華書局版二十四史『旧唐書』、2274頁)

本に関する記述に疑問がある。

次に疑問点を列記し各々について検討する。

- ① 煬帝は、倭王多利思北孤の國書のどこに立腹したか？
- ② 煬帝は、倭王の國書について立腹したのに、なぜ、裴世清を倭国に派遣したか？
- ③ 裴世清は、何時帰国したか？
- ④ 倭国と倭国は、同一国か？

(1) 煬帝は國書のどこに立腹したか？

倭王は、大業3年に使者を送り、使者に
使者曰「聞 海西菩薩天子重興佛法 故遣朝拜兼沙門數十人來學佛法」

と述べさせると共に、國書には次のように

其國書曰「日出處天子致書日沒處天子無恙」云々と記述している。このことについて、煬帝は
帝覽之不悅、

謂鴻臚卿曰「蠻夷書有無禮者、勿復以聞」

(以上、中華書局版二十四史『隋書』1827頁)

と立腹した。

「日出處・日沒處」*1 は単に東西の方角を表す仏教用語で、「菩薩」も仏教用語である。倭王は仏教用語として「天子」を用いており、仏教的には対等としての立場をとっている。

煬帝は、夷蛮国として隋に朝貢するために使者を派遣した国王が、仏教的には対等の天子としていているところに立腹したものと思われる。

(2) 煬帝は、多利思北孤の國書について立腹したのに、なぜ、裴世清を倭国に派遣したか？

① これについて、小幡雅雄氏が『隋書』倭国伝(1)「裴世清はなぜ遣使されたか」*2において、次のとおりと述べている。

—前略—

倭国を訪れた隋使が「弓・矢・^{ほこど}稍・弩・斧あり」と倭國軍の武器類を見とり、「皮を漆りて甲となす」倭國軍が騎馬軍制を用いない編成である事を武器から判断している。更に倭国が「常備軍隊はあるの

だが出征しない」事迄も確認した。

それ故、倭国王との会見後、隋使裴世清は「皇帝の命令は全て達した」旨、倭王に念を押して帰国の途についている。

即ち、607年の「無礼」にも拘わらず、煬帝が裴世清を倭に遣わしたのは、対高句麗討伐に先立って、倭国の軍備編成及び倭国の動向を確認するためであった。

当時の東アジア世界においては、隋を軸として周辺諸国の思惑が入り交っていたが、その中にあって隋対高句麗の武力衝突が再開された場合、倭国がどのような行動に出るかについて、隋は新羅・百済のそれ以上に關心を持ったのではなかろうか？

「新羅・百済は倭国を大国で珍しい物も多い国として敬仰」『隋書』に記されていた程の実力を有していた倭国を、「無礼」にも拘らず無視できなかったのである。

—後略—

(『市民の古代研究』・合本第1巻、238・239頁)

私は、この小幡氏の意見に賛同する。

先代の文帝は、開皇18年(598年、推古6年)に高句麗遠征を行ったが失敗した。そこで、煬帝は、大業8年(612年、推古20年)に高句麗に遠征するために、事前に倭国の軍備の実情を調査させたものと思う。

② 裴世清は、倭国の実情を詳しく調べた様子が倭国伝の状況を、別表C「倭国の実情」に整理したとおり、日本の実情については、中国史書のうち、『隋書』に最も詳しく記述されている。すなわち、煬帝による倭国の詳しい実情調査は、小幡説を支持していると思う。

(3) 裴世清は何時帰国したか？

(倭国の実情を調査するに要した日数は？)

① 裴世清が倭王に接見して、直ちに帰国したのでは、倭国の詳しい状況は分からないと思う。帰国に関して、次のとおり記述されている。

其後清遣人謂其王曰「朝命既達請即戒塗」

*1 『摩訶般若波羅蜜多經』の注釈書『大智度論』卷十に

答曰……汝言 日出處是東方。日行處是南方。日沒處是西方。日不行處是北方。是事不然。

(大正新脩『大藏經』第25巻、133頁、大正15年1月、大正新脩大藏經刊行会)

*2 『市民の古代研究』合本 第1巻：1992(平成4)年、市民の古代研究会編、新泉社

初出：「市民の古代研究」34号、1989(平成元年)年7月、市民の古代研究会編

於是設宴享以遣清 復令使者隨清來貢方物

(中華書局版二十四史『隋書』1828頁)

ここでいう「朝命」とはどのような命令であろうか。高句麗遠征計画を行うに際し倭国が支障になるとして、倭国の実情及び倭王の意向を煬帝自らが把握することではないだろうか。その調査が終了したので、帰国するための準備を依頼したものと思う。それが「戒塗*1」という語句になったのであろう。

裴世清の帰国は、東夷・倭国伝の

復令使者隨清來貢方物

及び帝紀(煬帝上)大業6年條の

倭國遣使貢方物

から大業6年だと思われる。そして、2年後の大業8年に、煬帝は高句麗遠征を行った。倭国の実情を把握したので、後顧の憂いなく遠征したと思われる。

② 帝紀・大業4年3月條の

壬戌 百濟・倭・赤土・迦羅舍國並遣使貢方物

(中華書局版二十四史『隋書』71頁)

から、裴世清は大業4年3月に帰国したとも考え得るが、『三国史記』百濟本記第五(武王紀)の9年(大業4年、608年)條に

九年 春三月 遣使入隋朝貢 隋文林郎裴清奉使倭國 經我國南路

(『完訳 三国史記』下*2、514頁)

と記述されている。このことから、裴世清が倭国に到着したのは、大業4年3月以降である。

すなわち、大業4年3月隋に朝貢した倭(倭)遣使と裴世清とは、すれ違いであると思われる。

また、「東夷一琉球国」の大業4年條に

明年(大業四年) …… 時倭國*3(倭国)使來朝 見之曰「此夷邪久國人所用也」

(中華書局版二十四史『隋書』1825頁)

と記述されている遣使は、帝紀に記述されている遣使と同一人物と思われる。

(4) 「倭」と「倭」とは同一国か？

① 『隋書』における「倭」と「倭」との記述状況は次のとおりである。

・倭：列伝第四六(東夷一百濟・琉球国・倭国)、志第十(音楽下)

・倭：帝紀第三(煬帝上)

② 倭国の歴史は、『隋書』以前の中国史書でいう「倭国」の歴史である。

③ 中国史書における隋までの「倭」等の記述状況は別表D“中国史書における「倭、倭」一覧”のとおりである。

④ 「倭」の本字は「大倭」と思われる。その傍証に、『法華義疏』には

法華義疏第一 此是大倭國上宮王私集非海彼本

(古田武彦著『古代は沈黙せず』、86頁・写真)

と記載されてる。

⑤ 「倭」の意味は、

よわい (『大漢和辞典』巻一、775頁)

とされている。

⑥ 煬帝は、「大倭」を「倭」と読ませて、卑しめたとと思われる。

傍証として、「新」の王莽は「高句麗」を「下句麗」として卑しめている。このことは、『漢書』王莽伝、『後漢書』東夷一高句麗、『三国志』烏丸鮮卑東夷伝一高句麗傳に記述されている。

⑦ 大業四年條には「倭国(倭)からの遣使」と「煬帝の裴世清派遣」の記事が記述されている。

○倭国(倭)からの遣使

・帝紀第三(煬帝上)

(大業四年三月) 壬戌 百濟・倭・赤土・迦羅舍國並遣使貢方物

・列伝第四六(東夷一琉球国)

明年(大業四年) 帝復 令寬慰撫之 流求不從 寬取其布甲而還 時倭國使來朝 見之曰「此夷邪久國人所用也」

*1 戒塗：旅行の準備をする。

*2 『完訳 三国史記』下：金富軾著、金思燁訳、昭和56(1981)年2月、六興出版

*3 倭国：原文は「倭国」であるが、校勘記で「倭国」に修正している。

(『大漢和辞典』巻五、25頁)

○煬帝の裴世清派遣

・列伝第四六（東夷—倭国）

明年（大業四年）上遣文林郎裴清使於倭國

・『三国史記』百濟本紀第五（武王）

（武王）九年春三月 遣使入隋朝貢 隋文林郎裴清奉使倭國 經我國南路

これらの記事から考察するに、帝紀では、他の中国史書に記述されている「倭」を用い、列伝では、煬帝に送られた国書での自署名「大委=倭」を用いたと思われる。

なお、中華書局版二十四史『隋書』列伝第四十六（東夷—百濟）の校勘記（※校訂）で

・「其人雜有新羅高麗倭等」：「倭」原作「倭」。按古從「委」和從「妥」的字、有時可以通用。如「櫻」或作「綏」、「綏」或作「綏」。「倭」應是「倭」字的別體。本書煬帝紀上作「倭」。本卷和他處「倭」者、今一律改爲「倭」。

（中華書局版二十四史『隋書』1829頁）と、「倭」は「倭」に校訂されている。

「東海の古代」154号（平成25年6月）に引き続いて、「七支刀と『こうやの宮』の人形の考察」を掲載します。

1～6

七支刀と「こうやの宮」の人形の考察 その2

名古屋市 石田敬一

7

『石上神宮七支刀銘文図録』*1（以下『銘文図録』という。）の写真により、私が判断するに、

表に34字、裏に27字、表裏併せて61字あるうちで、判読可能なものは34字、判別しづらい字や全く読めないものが合わせて27字あります。判別しづらい字や全く読めないものについては、次のとおり㊶やAのように示しました。

以下、『銘文図録』の写真に基づいて、ほぼ異論のない文字を除き、これらの記号で示した判別しづらい文字について、一文字ずつその表示を判別し、妥当な文字を推測します。まず年号のある〔表〕について検討します。

〔表〕

泰^①四年^②月十^③日丙午正陽造百練^{④⑤⑥}刀^⑦辟百兵^{⑧⑨}供^⑩王^{⑪⑫⑬⑭}作

① 栗原朋信氏は、『晋陽秋』や『晋の起居注』に「泰和」と記述されている例を発見し、晋の年号である「太和」は「泰和」と記述されていたので、この七支刀の年号「泰■」は晋の年号「太和」であると結論づけました。しかし、七支刀の陰刻から判明するのは、あくまで「泰■」であって、「泰和」ではないのです。

さらに重要なことは『晋書』に出現する年号は、すべて「太和」と記述され「泰和」は全く記述されていないことから、この七支刀の年号が晋の年号であったのだとすれば、私は、まず「太和」と陰刻されるのが普通だと思います。しかも、七支刀の金象嵌銘文では、ただでさえ、文字の一部を省略するなど簡便な文字にしているのに、わざわざ「太」を複雑な文字の「泰」に変えるのでしょうか。論理的ではありません。

「泰和」と推測する学者は、『晋書』帝紀の武帝泰始元年條の改曆に関する記事で「改景初曆為太始曆」とあることなどを根拠にされます。「泰始」を「太始」とする『晋書』の記述を根拠に、この銘文は「太和」を「泰和」に記述したに違いないとされるのです。

私は、これは明らかに間違いだと考えます。

たしかに、『晋書』の例から「泰」を「太」とすることはありうるのだと考えられます。ただし、その逆の「太」を「泰」にする例は『晋

*1 『石上神宮七支刀銘文図録』：村山正雄編集、平成8（1996）年12月、吉川弘文館

書』にはありません。したがって、「太」を「泰」にすることが正しいとはいえないのです。つまり、逆は必ずしも真ならずです。

「太和」説は、本来「太和」であった年号をより複雑な文字の「泰和」に書き換えたという仮定の上に立った論理です。この「太和→泰和」の論理が成立して、はじめて「泰」の次に来る文字を「和」とする可能性が生まれるわけですから、「太和」に至る課程が一般的ではない以上、この年号を晋の「太和」とする推測は、大いに疑問です。

なお、「初」や「始」に関しては、やはり、偏の2本の線だけで「初」であるとか「始」であるとか決めるのは、困難でしょう。

さらに、この㊶の文字に関しては、もうひとつ問題があります。

『銘文図録』の写真では、㊶にあたる文字は、偏がほぼ直線にみえますが、石上神宮大宮司であった菅政友が記した『外来金器文字記』(以下、『文字記』という。)の「大和國石上神宮寶庫所藏六支刀」では、偏の縦線がわずかに「く」の字に曲がっているように表示されていることです。

明治の初めに菅政友が見たときには、「く」の字にみえたということなのでしょう。

『銘文図録』の写真は曲がっていません。しかし菅政友は曲がって表示しました。形が違います。どうなのでしょう。実物を確認できないので、手元にある資料だけで推測するしかありません。

ただ、ヒントはあります。〔裏〕のDの文字です。これは『文字記』では、明らかに「不」の文字と認識されていますが、『銘文図録』の写真では、二画目の斜めの象嵌された金が陰刻から剥がれて折れ曲がってしまい「不」とは読めなくなっています。象嵌された金が浮き出た上に曲がってしまい、異なる文字に見えるようになってしまったのです。このことを考慮すると、この㊶は、本来、曲がっていた形が、象嵌された金が剥がれるなどして、まっすぐになってしまったのではないかという可能性があります。

もし、もともとは㊶の偏の陰刻が「く」の字に曲がっていたとしたならば、女偏の可能性が高まりますので、「和」「初」「始」の中では、「始」

がもっとも当てはまるように思います。

旁については、『文字記』では、わずかに何らかの金工象嵌の陰刻があるように表示されています。それは「口」とおぼしき形の上に判読不能な線から構成されています。菅政友が明治の初めに見たときには、「口」だけではなく、その上に何かが見えていたということになります。となると「始」の文字であった可能性は高まります。

一方、『銘文図録』の写真では、旁の部分は削られて何も見えなくなっています。全く判読不能です。

つまり、『文字記』から『銘文図録』のタイムラグの間に文字を判読するために鏽を削り落とすなどの処置を行ったとすれば、そのために損傷した可能性があります。そこで、オリジナルに近いと思われる『文字記』を重視すると、㊶は「和」とはいえず、むしろ「始」であるように思われます。禾編とした場合には、ちょっと縦の長さが小さく寸詰まりの感がありますが、女偏であるとしたら、文字の大きさのバランスがとれているようにも思われます。

ただ、『文字記』では、表示されていませんが、『銘文図録』の写真では、金工象嵌の縦棒のほかに傷かどうか判断できない陰刻らしきものがあって禾編のようにもみえます。菅政友は、これらの陰刻状の傷跡に気がつかなかったのでしょうか。これもまた疑問です。

いずれにしても、私には判読不能です。

推測する文字としては、「泰和」の可能性が^{たいわ}るように思いますが、「泰和」は、金朝の年号(1201年～1208年)であり、時代背景からこの年号である可能性は低いでしょう。

また、女偏の「始」とすると「泰始」ですから、この年号は、西晋の元号(265年～274年)、程道養の元号(432年～437年)、宋の元号(465年～471年)のどれかにあたることになります。しかし詳細は、他の文言と照らし合わせないとわからないので、結論は後へ送ります。

いずれにしても年号の最初の文字が「泰」であることに異論は有りませんから、「泰」から始まる中国の年号とすれば、それは、次のいずれかしかありません。これらの年号のうち、2の

「泰常」は文字の上からも、北魏である点からも除外されるでしょう。従って1、3、4のいずれかとなるでしょう。

NO	国等	年号	期間
1	西晋	泰始	265～274年
2	北魏	泰常	416～423年
3	程道養	泰始	432～437年
4	宋	泰始	465～471年

② 「五」

多くは「一」「四」「五」「六」「十一」であろうとされますが、明確にわかる陰刻は、横棒だけのようです。

ところで、刀剣や鏡などの金属器を造るには、暑い夏が最適であるということから、実際の日の干支や製造日とは関係なく、盛夏を意味する「五月丙午」を吉祥句や常套句として使用されます。

たとえば、奈良県天理市の東大寺山古墳とうだいじやまから出土した鉄刀には、

中平口口五月丙午造作支刀百練清剛

(口は不明な文字。以下同じ)が刻まれ、兵庫県養父市の箕谷2号墳みいだにの鉄刀には

「**戊辰年五月口**」

が刻まれています。また、中国の山東省蒼山県出土の大刀には

永初六年五月丙午造卅凍大刀吉羊

とあります。

したがって、横棒だけがはっきりとわかる程度の陰刻によっては、どんな文字か判別できませんが、これらの刀剣の吉祥句の例からすると「月」の後に続く「丙午」が明確ですので「五」の可能性が高いと思います。

③ 「六」

菅政友の『文字記』では「五」のように見えますが、菅政友が確認できなかった部分が、『銘文図録』では明瞭です。錆を落とした結果、見えるようになったのでしょうか。「六」の第3画、第4画である「ハ」の部分ハが金工象嵌の陰刻として確認できます。

したがって、「六」が妥当でしょう。

以上のところまで、年号や日付に関して、推測する文字とその意味について、私の意見をまとめると次のとおりです。

泰口四年五月十六日丙午正陽

泰口四年五月十六日へいこ丙午の(名刀を精錬するのに相応しい)暑い正午に。

先に示したとおり『日本書紀』の神功皇后紀五十二年において、

久仄等從千熊長彦詣之則獻七枝刀一口七子鏡一面

とあって、書紀編者は神功皇后を卑弥呼・壹與の時代にあてており、この七支刀は卑弥呼の時代にもたらされたと思われています。

神功皇后紀六十六年においては、

晉起居注云武帝泰初二年十月倭女王遣重貢獻

と記述されており、書紀編者は神功皇后を卑弥呼の後継者壹與に当てはめています。この記事にある年号泰初については、『晉書』倭人條に

其女王遣使至帶方朝見其後貢聘不絶 ……

泰始初遣使重譯入貢

とあり、また『晉書』武帝紀に

泰始二年十一月己卯倭人來獻方物

とあることから、西晋の年号である「泰始」のことと考えられます。

しかしながら、「泰始」の記事は、神功皇后紀六十六年であって、これより14年先の神功皇后紀五十二年に「七枝刀」の記事があり、「泰始」の年号が始まる前に「七枝刀」の金象嵌銘文で「泰始」が陰刻されたことになってしまいますので、時間の関係が後先になります。

したがって、この七支刀の金象嵌銘文きんぞうがんめいにある泰始四年が、単純に268年であるとはいえないこととなります。

なお、正陽とは正午の太陽のことを意味しますので、盛夏の中でも、いちばん陽が強い時にこの刀を造ったということを表していると思います。

④ 「金」 + 「?」

通説では「鍔」、「鉄」、「鐵」、「鋼」などとされます。

偏は、金偏の上部の一部のように思われます。

また旁は「丁」や「頁」などの上部の一部のように思われますが、失われた部分が多く、判別は困難です。ただ、この刀は鋼などを百練して造ったという意味であるとすれば、通説の文字のどれもが妥当な推測であろうと思います。一応「鋼」とします。

⑤ 「七」

菅政友は「世」に見えたのだと思います。ただ、「世」であるとする横棒が左にでている部分の長さが、長いように思います。別の言い方をすれば、横棒の中心から縦棒がでているように思われ「世」では縦棒の位置のバランスが悪いようです。通説の「七」が妥当でしょう。

⑥ 「支」

「字」や「写」のようにも見えますが、前後の文字から、通説の「支」が妥当でしょう。

以上の部分に関して、推測する文字とその意味について、私の意見をまとめると次のとおりです。これは通説と同じ解釈です。

造百練鋼七支刀

何度も鋼を鍛練して、この七支刀を造る。

⑦ 「出」

この⑦の金工象嵌の陰刻については、裏面にある「生」の文字の一部と同じ形状をしており、「生」の可能性が高いと思われたので、「生」を後につづく文字「辟百兵」に関連づけて、「生辟百兵」と推測しましたが、「生きるもの百兵を辟けん」のように解釈が苦しく、適切には思われません。

そこで、私は、「生」を次のように「七支刀」の後に繋げて「生む」と解釈しようとしていました。

造百練鋼七支刀生

何度も鋼を鍛練して造り、この七支刀を生む。

これまでの解釈より、こちらの方が一見素直ではないかと思いましたが、中国の史料では、「刀」の次に「生」を続けた記述の例が皆無であり、これもふさわしくありません。

となると、濱田耕策などのようにセカンドベストとして、「出」とする説が可能性として残り

ます。

「出」とすれば、「出辟百兵」となり「出でて百兵を辟けん」となります。

⑧ 「冃」又は「宜」

わかんむり「冃」、又は、うかんむり「冃」の陰刻と思われます。その下に「日」「目」「且」などのような陰刻があるようです。「冃」又は「宜」としてよいでしょう。「冃」は「宜」の異体字ですので、どちらでも同じ意味となります。「よろしい、かなう」や「なるほど、いかにも、まことに」等という意味でしょう。

⑨ 「俚」

通説は「俚」ですが、私には「俚」には見えません。偏は人偏でしょう。旁は「央」又は「兵」に見えますので、「俚」又は「俚」に近いと思います。

ただ、「俚」「イ兵」は、それぞれ「あおぐ、あおむけ、たのしむ」や「いつわり」などの意味で、この金象嵌銘文にはなじまず、また他にこれらの意味を表すのに適当な文字があって、ほとんど使われていない文字ですので、該当しないと思われま

す。消極的賛成で通説に従います。したがって、「俚俚」となりますが、通説では「俚俚」を「恭恭」として吉兆句で「うやうやしい」とします。

私は「俚俚」のままとして、「そなえ、ささぐ」の意であり、同じ文字を重ねることで「そなえ、ささぐ」ことを強調したと解します。

⑩ 「侯」

垂れは、しかばね「尸」、又はがんだれ「尸」に見えます。

ただ、次に続く文字がほぼ「王」であることは間違いなさそうなので、となると「侯王」と読む可能性が高いといえま

しょう。中国の准河流域出土とされる日光大明銅華重圈鏡には

「見日之光天下大明服者君卿鏡辟不羊富於侯王錢金満堂」

とあり、また、京都府木津川市の椿井大塚山古墳から出土した画文帯環状乳神獸鏡、三角縁銘帯四神四獸鏡には、それぞれ

「作明如光服者侯王九子」、

「上有山口孫位至侯王」

が刻まれていることから「侯王」とするのが一般的な読み取りです。

なお、「侯」と「侯」は字形が似ていますが、全く異なる意味であり、「王」の前に使われる場合は、「侯」が正しい文字です。

以上の記述に関して、私が推測した文字とその意味について、整理すると次のとおりです。

出辟百兵宜供侯王

出でて百兵を辟ける。誠に侯王にそなえ、ささぐのによろしい。

⑪ 全く不明

⑫ 全く不明

⑬ 全く不明

⑭ 全く不明

⑪から⑭までは全く不明ですが、最後に「作」が続くとすれば、作者名に関するものが陰刻されているものと思います。

これまでの考察を踏まえ、〔表〕の記述をまとめると、次のとおりです。

泰口四年五月十六日丙午正陽造百練鋼七支刀 生辟百兵宜供侯王■■■■作

泰口四年五月十六日丙午の暑い正午に、何度も鋼を鍛練してこの七支刀を造る。出でて百兵を辟ける。誠に侯王にそなえ、ささぐのによろしい。■■■■作る。

8

次に、〔裏〕の記述について検討します。

〔裏〕

先世⑮来未有⑯刀百⑰王世⑱⑲⑳聖A故為B王C
造DEFG

⑮ 「𠂔」

金工象嵌の陰刻は「▽」しか確認できません。前後の文字から、通説どおり「以」の異体字である「𠂔」とするのが妥当でしょう。

⑯ 「此」

通説は「此」ですが、何をもってそう判断す

るのが判りませんが、他に良い考えを持ち合わせないので、一応通説に従います。

〔裏〕の記述について、最初の文字から「刀」までをまとめると次のとおりです。これは通説の読みと変わらず、異論は少ないところでしょう。

先世以来未有此刀

先世以来、このような刀は未だ有らず。

⑰ 「濟」

偏はさんずい「𠂔」です。旁は「慈」や「齊」に見えます。X写真により旁の下半分に「月」の最上部の横棒がない陰刻が明瞭になったことで「濟」で間違いのないと思います。すなわち前後の文字と合わせて「百濟王」を示しています。

⑱ 「子」

通説は「子」としますが、「子」とは判別不可能です。陰刻では全く不明です。ただ、「百濟王世」の文字はほぼ間違いのないと思われるので、百濟王の世嗣であろうということで「世子」の「子」と推測するものです。

⑲ 「奇」

下半分は「可」ですが、上半分は「可」又は「大」又は、うかんむりの付いた「大」のように見えますが、いずれも、じっくりきません。一応、通説に従い「奇」とします。

ただし、私は不思議にもという意味で「奇しくも」と読み下します。

つまり「奇生聖」となり「奇しくも生まれながらの聖であり」と解します。

⑳ 「普」

一般的には「音」や「晋」に推測されています。しかし、「晋」の上にさらに横棒状に見える点線があり「普」に近いと思われます。「普」とする説は、ほとんどないようですが、私は広く一般に知れ渡るといふ意味の「あまねく」を示しているのではないかと思います。

A 「倭」

この陰刻で文字を判断するのは、たいへん難

しいと思います。陰刻だけでは「倭」と断言することはできないでしょう。ただ、後に「王」があることから、倭王を推測させますので、「倭」の可能性はあると思います。

通説に従い、「倭」とします。

B 「旨」

陰刻で判るのは、上部は横棒二本の「二」とわかり、下部の「日」は明確ですが、その間にある「人」らしき線を陰刻か傷かどのように判断するかです。それによっては「元」と「日」が重なったような文字にも見えます。

これも通説に従い、「旨」とします。ただし名ではなく、次の「造」に繋がり「うまく、巧みに」という吉兆句ではないかと思います。

C 「傳」

陰刻で判るのは、人偏であることと、旁は上部が「十」で下部は「田」ですから、「傳」のうち下部の「ム」と「寸」が省略された形のようなものです。「傳」の簡体字と考えて良いのではないのでしょうか。

D 「示」

象嵌された金が浮き出た上に曲がってしまったところを元に戻せば、「示」です。

なお、菅政友が記した『文字記』では「不」とされますが、『銘文図録』では「不」の上に、離れて横棒の陰刻が見えますので、「示」としてよいでしょう。

E 「後」

人偏は判ります。旁には二カ所「ノ」がありますが、「後」とは判りません。菅政友の『文字記』では、「後」に近い形で表示されています。前後の意味から、「後」と想定します。

F 「世」

『銘文図録』では、下の方がわかりませんが、『文字記』では、まさに「世」となっています。

「世」と考えます。

以上をまとめると、裏側の銘文を推測した記述と読み下しは、次のとおりです。

〔裏〕

先世以来未有此刀百濟王世子奇生聖普故為倭王旨造傳示後世

先世以来、未だこのような刀は有らず。百濟王の世子は奇しくも生まれながらの聖として普く知れわたる。故に倭王の為に旨く造り、後世に伝え示さん。

百濟王の世子すなわち世継ぎが不思議なことに生まれながらにして聖であったことから、その世子が倭王のために七支刀を巧みに造って贈ったということになりましょう。そこで、この七支刀はたいへんに力があるということをしていわれているのでしょう。

9

問題は、この聖をどのように解釈するかですが、仏教伝来後の日本では、聖を学徳の高い仏教僧とされますが、ここでは王の世継ぎですから学徳の高い人物という意味だと考えられます。

しかしながら、百濟王の中で、だれが幼い頃から学徳の高い人物だったかは記録が無いようではわかりません。ただ、文献上で、幼年期に聡明であるとされる百濟王が一人だけ確認できます。

『日本書紀』雄略天皇二十三年（479年）に、次のとおり記述されます。

廿三年夏四月百濟文斤王薨 天王以昆支王五子中 第二末多王幼年聰明 勅喚内裏 親撫頭面 誠勸慰使王其國仍賜兵器 并遣筑紫國軍士五百人衛送於國 是為東城王

二十三年夏四月、百濟文斤王が急死し、天王は、昆支王の五人の子のなかで、幼少ながら聡明であった第二子の末多王を内裏に勅喚し、親しく頭を撫でて慰勸に戒め、其の国の王として武器と併せて筑紫國の軍士五百人を遣り、國に衛送させた。これを東城王と為す。

この記事は、『日本書紀』の大義名分で記述されているので、雄略天皇が末多王を百濟王に選り決定させた書きぶりとなっており、そのまま鵜呑みにすることはできないでしょう。末多王は、当時人質として日本に滞在していたので、

こうした記述になっているのかもしれませんが。

ここで問題にしているのは、昆支王の第二子の末多王が、文献上で、幼年聡明と特定できるということです。幼年期に学徳の高い人物として唯一想定できる者と考えられます。聡明とは物事の理解が早く賢いことですから、聡明の記述は、学徳のうち学があることを言い表していると考えて良いでしょう。

また、『三国史記』には「東城王諱牟大或作摩牟 文周王弟昆支之子 胆力過人善射百發百中 三斤王薨即位」とあり「東城王の諱は牟大、或いは摩牟と作る。文周王の弟である昆支の子で、人より胆力があり、善く弓を射て百發百中であつた。三斤王の薨去により即位した」とあります。胆力とは、事にあたって恐れたり尻ごみしたりしない精神力で、それが人より優れているということです。徳とは、卓越性、有能性のあるすぐれた品性や人徳であり、徳を備えた人間は、他の人間からの信頼や尊敬を集めるという点で、胆力は徳と重なり合うところがあると考えられます。つまり、東城王（末多王）は、学徳の徳をも持ち合わせていたとすることができます。

したがって、七支刀の裏面に陰刻された「百濟王の世子」は、末多王と考えるとよいのではないのでしょうか。

この末多王が百濟の第24代の王（在位：479年～501年）の東城王になります。雄略紀の479年の記述では、雄略が末多王の頭を撫でて戒めるというのですから、末多王は、その頃まだ幼少であつたように記述されています。雄略紀では、いかにも小さな子供であるかのようにですが、にわかには信じられません。というのも、東城王の第2子とされる武寧王は、武寧王陵墓誌から、その生年が462年と判明していますので、末多王が在位に就いた479年の時点で末多王は成人であつたこととなります。479年には、武寧王はすでに17歳ですから、当然のことながら、その親の末多王は、生年が不詳であるものの、りっぱな大人になっていたはずで、479年時点で幼少とする雄略紀の書きぶりとはずいぶん違います。

したがって、七支刀の年号である「泰□四年」は「泰始四年」であり、それは、468年である可能性が高いと考えます。つまり〔表〕の記述は次のとおりとなります。

泰始四年五月十六日丙午正陽造百練鋼七支刀
生辟百兵宜供侯王■■■■作

小林達雄氏のエヴァンズ説批判について

— 縄文土器太平洋横断説批判 —

知多郡阿久比町 竹内 強

小林達雄氏（国学院大学名誉教授）は「縄文土器の個性と主体性」*1 という論文で、エクアドルで発見された土器についてのエヴァンズ説批判をされているので紹介する。

— 前略 —

一方、アメリカ大陸においても土器は作られ、使用された。とにかく土器は人間が歴史上で発明したさまざまなものの中で、大宗なもの筆頭に位置づけられ、あちらこちらで発明されるほどいいかげんなものではない。この思い込みは、アメリカ大陸の土器について独自の発明という可能性については一顧だにせず、その原郷土を新大陸の外の誰も知らないどこかに求めてきたりしていた。そこにエクアドルで大量な土器が発見され、一部の文様に縄文土器の影を読みとり、太平洋を漕ぎ渡って縄文土器が伝来したのではないかという仮説を生んだ(Meggors and Meggers 1965)。ワシントンD.Cのスミソニアン博物館で、その長い道のりが壁面に大きく展示されたほどである。しかし、たちまちに『Current Anthropology』や『American Anthropologist』に反論がよせられた。さすがに今では、遠大な仮説も下火になっている。もっとも、さしたる具体的な根拠もなく、中南米の古典文化の石影モチーフが中国古代の青銅器に由来したとする仮説がいまだに思い出したように息を吹き返したりする。他人の空似を同

*1 「縄文土器の個性と主体性」：『総覧 縄文土器』（小林達雄編、2008年6月、アム・プロモーション）

じ血を引く親族と早合点するようなものだ。そこには、狭い考古学にのめりこんで、視覚的にモノを矯めつ^{すが}めつしながら思案投首の繰り返して袋小路に迷い込んでいる考古学特有の弊害がみえるのだ。歴史を観る哲学あるいは通常の目線で視るべき人間学が欠けている。

しかし、アメリカ考古学界(SAA)における1990・91年の2回にわたって開催されたシンポジウムには研究の蓄積と成果および新しい地平が展開されている(Barnett and John 1995)。あらためて留意すべきは、アマゾン河流域に7500年ほどさかのぼる貝塚から出土する土器の存在であり、現在新大陸における最古に位置づけられるのである(Roosevelt 1995)。さらに、北アメリカのフロリダ以北に広がる東海岸の貝塚形成地帯で、無土器から土器文化への課程の研究が具体的に進められており、注目される。これらの成果からみても、太平洋に面する中米エクアドルの土器群は、少なくともアマゾン河流域の土器の後胤^{こうえい}とみるべきで、ましてや縄文土器を親とするのには相当な無理がある。

—後略—

(『総覧 縄文土器』843頁)

小林氏は、かつてメガーズ博士(エヴァンズの夫人で共同研究者)が来日したときに開催された「縄文ミーティング」(全日空ホテル、1995年11月3日)に参加され、サン・ハシントン遺跡(コロンビア)の口縁に突起のある土器に関して、当惑気味に「これは確かに似ているんですよ」と語っていたと*1、立ち会った古田武彦氏がその印象を述べている。ただ、小林氏がその後、エクアドルに直接調査に行かれたという話は聞いていない。

考古学という狭い世界から捉えてはいけないという小林氏のご意見は、そのまま氏にお返ししなければいけない。

古田武彦氏は『三国志』魏志倭人伝に登場する裸国・黒齒国が南米エクアドル・ペルーの地ではないかと述べられ、文献史学の立場からの縄文人の太平洋横断説を唱えている。

又、医学的な立場から、田島和雄氏(現愛知

県ガンセンター研究所長)は、日本列島の太平洋岸の住民に分布するウィルス(HTLVI型)と同一のウィルスが南米北・中部山地のインディオに濃密に発見されたと報告されている。*2

ブラジルの寄生虫研究の専門家グループによる研究は、南米の北・中部に分布するモンゴロイドのミイラ(3500年前、縄文後期)の糞石から発見された寄生虫は、アジア産、特に日本列島に多い種類もので、寒さに弱くて摂氏22度以下では死滅するので、一般的に言われる「ベーリング海峡横断ルート」は不可能という。*3

果たしてこれらの研究に対して小林氏はどう答えるのであろうか。

6月例会報告

○ 縄文土器の特徴

知多郡阿久比町 竹内 強

青森県外ヶ浜町の大平山元遺跡で発見された縄文土器は、炭素14による年代測定では16,500年前と診断された。これまで発見されている土器の中ではもっとも古いといわれている。その縄文土器が、他の土器と違う形態上の特徴は、口縁部の突起である。およそ土器の使用目的(煮炊き・貯蔵・お供え)から見たときそれは、邪魔なものなのである。更に、製造過程においては、大変な苦労がかかるのである。決してバランスもよくない。この形態の土器が北海道から沖縄まで広範囲の遺跡から出土していることを説明した。

○ 日本の原郷問題

名古屋市 加藤勝美

高天原の所在について簡単に説明した。

高天原について実質的に記述している文献は『古事記』を以てほかにない。その『古事記』の記述によれば、高天原の範囲は、最大は宇宙全体から最小は小さな村まで様々である。が、

*1 古田武彦著『海の古代史』(1996年10月、原書房)、29・94頁参照

*2 『海の古代史』16頁参照

*3 『海の古代史』16・17頁参照

影井昇著「太平洋を渡ったモンゴロイド」(『Anima』N0229、1991年10月、平凡社)参照

具体的な地名として記されているのはもっぱら出雲島（島根半島）に限定されているので、高天原は島根半島内であるに相違ないことを述べた。

○ 推古紀における遣隋使について

瀬戸市 林 伸禧

本年7月で開催される「愛知セミナー2013」で発表する予定の概要について述べた。

・『隋書』倭国伝と『日本書紀』推古紀での唐使裴世清についての対応状況から、推古紀では12年繰り上げているのではないかと。

・煬帝はなぜ立腹したのか。

・煬帝は立腹したのに、なぜ、裴世清を倭国に派遣したのか。

・「其國書曰『日出處天子致書日沒處天子無恙』云云」は聖徳太子が述べた言葉か。

等の疑問について仮説を提示したが、難しすぎるとの意見があった。

○ 日本神話と貝文化考

名古屋市 佐藤章司

『日本書紀』では、天武天皇は飛鳥浄御原宮で即位したとされるが、「那須国造碑」や「小野毛人の墓誌銘」で刻まれている飛鳥浄御原宮とは違うのではないかと思ひ検討を加えた。

その結果、天皇や冠位制度とのかね合い等から、天武は「天皇」とは称されておらず、また、「八色の姓」の臣下のナンバーワンである真人の姓を名に持っており、冠位を授与する立場ではなかったことが再確認できた。

これを受けて、新益京（藤原京）の正面に建立された薬師寺（本薬師寺）は、天武ではなく九州王朝の天皇の誓願により、皇后の病氣平癒を祈って立てられた寺であるとした。白鳳文化の結晶であるその寺は、藤原京から平城京に遷都された際に、現在の西の京の地に移築されたと述べた。

○ 聖徳太子の謎

名古屋市 石田敬一

7月開催のサマーセミナーで行う「聖徳太子の謎」について、簡潔に説明した。

7月例会予定

日時：7月14日（日）3・4限

3限：午後1時10分～2時30分

4限：午後2時50分～4時10分

場所：南山大学・R棟、R32教室（3階）

参加料：無料

交通機関：

・地下鉄名城線「八事日赤」下車、徒歩10分

・市バス「山手通二丁目」下車、徒歩10分

駐車場：なし

今後の予定

8月例会：8月18日（日）名古屋市市政資料館

9月例会：9月15日（日） //

例会は、8・9月とも**第3日曜日**です。

時間：午後1時30分～5時

場所：名古屋市市政資料館

名古屋市東区白壁1丁目3番地

Tel:052-953-0051

参加費：500円（会員は無料）

交通機関

・地下鉄名城線「市役所」駅下車、東方向徒歩8分

・名鉄瀬戸線「東大手」駅下車、南徒歩5分

・市バス「市政資料館南」下車、北徒歩5分

・ // 「清水口」下車、南西徒歩8分

・ // 「市役所」下車、東へ徒歩8分

駐車場

・名古屋市市政資料館：12台収容（無料）

・ウィルあいち（愛知県女性総合センター）地下駐車場：南隣、有料（30分170円）

・鈴木不動産コインパーク：南東角交差点の東、有料（40分200円）

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。

例会での研究報告、見解発表は大歓迎です。資料を配付される場合は、「**20部**」ご用意願います。